柴北川プロジェクト通信　８号

平成２２年１月３０日（土）・３１日（日）

１．　山村再生プランの反省会となる合同会議の開催

柴北川プロジェクトにおいて、山村再生プラン事業としては最後の活動となる「反省会」、及び山桜視点場整備等を、１月 30 日・31 日に行いました。

３０日の「反省会」は、「柴北川を愛する会」と共助研との合同会議の形式で、昨年９月以降のこれまでの活動を振り返りながら、学校活用に関する今後の活動方針、及び山桜調査の締めとしての視点場整備計画（案）について話し合いました。

■　視点場の草刈りと長谷探検隊の活動が報告される

今回は、午前 11 時と少しゆっくりめで福岡を出発した一行（赤星副会長、木寺、波木、前田、森脇、矢ケ部）は、車内スペースもゆっくりめの 10 人乗りワゴン車て、雪は無いものの寒々とした冬景色の大分自動車道を、犬飼町長谷に向けてひた走りました。道中の天候は雨。時期が大寒とあって、もしかするとチェーン走行もやむなし、と想定しましたが、幸か不幸か雨模様。トンネルを抜けて見えてきた長谷の風景も、昼中ながら墨で刷いたような山水画の趣。いつもの青空の長谷とは一味も二味も違う幽谷の装いで迎えてくれました。

今日の会議は、終了後に地区の方々との「新年会」を控えているとあって、一同策略をめぐらし、投宿のホテルからマイクロバスで迎えに来てもらうよう、画策。（渡邊事務局長の個人的ネットワークの賜物ですが。）そのために、黒松生活改善センターに到着するや否や、森脇の運転でワゴン車をホテルまで持っていき、大分在住の波多野がホテルで森脇を出迎えて、会議開始前までに自家用車でセンターまで帰ってくるという段取り。（自家用車は、センターに夜間駐車で留め置き。）このあたりの手際の良さに、共助研会員の「反省会」（いや、「新年会」）に臨む並々ならぬ熱情が感じられました。

１５時開始の「反省会」には、「柴北川を愛する会」から大塚会長、後藤副会長、甲斐会長、安藤顧問、高柳役員、渡邊事務局長の６名が参加され、共助研からは福岡組６名と現地合流の玉田、波多野の計８名が参加しました。

「反省会」会議の様子

先ず、大塚会長（愛する会）から「これまでの２回の話し合う会での議論を踏まえて、一歩を踏み出す計画づくりをしましょう。」とあいさつがあり、続いて波木から本日のプログラムと山村再生プラン取りまとめに向けた内容紹介が行われ、一同は当日の会議の重要性をしっかりと確認しました。（会議後に、おいしい料理とお酒をいただくためにも）

続いて、渡邊事務局長（愛する会）より、前週の２４日（日）に実施された「松厳寺前視点場」の草刈り、及び中学生を主メンバーとする「長谷探検隊」による「栗ヶ畑城跡」の探索と歴史学習会について報告が行われました。

全面が枯れ草におおわれ雑木も成長しつつあった「松厳寺前視点場」の法面とその下の平場が、「愛する会」メンバー12 人の１日がかりの奮闘により見事に刈り取られた写真が映し出され、メンバーは翌日に控えた整地と施設設置の作業を思いめぐらしながら、その様子に見入っていました。

松厳寺前視点場の草刈りの様子

また、「長谷探検隊（二宮里桜隊長）」は、“幻の「栗ヶ畑城」を探索する”ということで興味津々の中学生５人と、中学生が参加するならと嬉しそうに付き添った大人 4 人の編成で実施されました。

当日は、栗ヶ畑城の当代城主甲斐正俊さんが城跡まで先導され、木々の生い茂る山道（前日、甲斐さんが、わざわざ草を切って道普請をされていたそうです）を登って、環濠（堀）跡や城館跡を見学したそうです。（ここでは、今でも「宋銭」が出るとのことです）また、下山後は、長谷地区の郷土史に詳しい安藤顧問（愛する会）による「栗ヶ畑城」史の講話があり、ふるさとの知られざる歴史に聞き入り感動する中学生達の様子が写真で紹介されました。

山道を辿る長谷探検隊

歴史講話に聞き入る長谷探検隊

■　身近な活動から始めて、確かな体制作りへ

続いて、会議のテーマは「学校活用計画」の検討に移りました。冒頭に、学校活用班の前田班長からこれまで２回の「話し合う会」での提案内容とそのまとめについて紹介があり、続いて、長谷地区のまちづくりとしてこれから進めるべき活動計画を短期・中期・長期に分けて提案し、その計画と関連して長谷小学校施設をどう使うかについて協議しました。

長谷まちづくりを語り合う

協議の中で、安藤顧問（愛する会）より、検討における重要な視点として、次の３つが提案されました。

活動計画検討における３つの視点（安藤顧問より）

① 今すぐにできることから、だんだんと広げていくこと。
② 区長さん達も巻き込んで、組織をきちんと作っていくこと。
③ お年寄りを取り巻く福祉の観点を重視すること。

安藤顧問から指摘された視点をもとに、前田班長の進行、波多野副班長の意見書き取りにより、参加者全員が約１時間半話し合い、概ね以下のような行動計画を立てました。この意見集約を基本として、最終的な「活動計画書」を作成することとなりました。

長谷まちづくり行動計画の提案

①　今の活動を広げていく

活動の場として、公民館ではなく学校施設を活用しては？

○　ふるさと写真の展示

○　ふるさとのカレンダー作り

○　情報発信もＯＡ教室から

○　『花いっぱいふるさと作り』をもとに広げていく

○　種まきも自分たちでやっていく

○　花から始め、枝葉が福祉へ繋がれば

○　長谷のマップ作り：長谷探検隊のやりやすさ　大人のサポートが必要

（押さえつけでなく主体性を大事に）

②　学校活用について

○　当面は市が運営していく

本館：耐震上の問題　→　民間へは引き渡しが困難

新校舎：公民館の分室（市が運営）　→　公民館活動として借用可能？

○　学校活用計画を積極的に計画、具体化していく

○　スケジュールを作成し提案

③　長谷カレンダーの作成

○　『花いっぱいのふるさと作り』の歳時記を作り、１年のスケジュールを広く示す

○　播種から開花までを写真を撮っていく

④　長谷マップの作成

○　長谷探検隊の成果：地区を知り、人を知り、地区の問題を知る

→　発表する場を周りが作る

押しつけではなく、自主的に継続していく

①～④を活動していくことによって地区全体に広がっていくのでは

■　松厳寺前視点場の整備計画を協議

一旦休憩を入れた後、次のテーマとして「山桜調査と視点場整備」に議論が移りました。

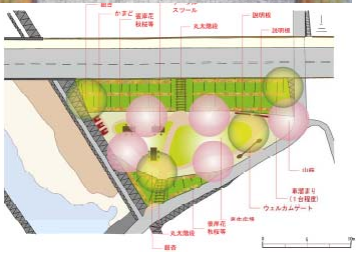
先ず、山桜班の矢ケ部班長から、パワーポイントを使ってこれまでの山桜調査に関する活動報告が行われ、続いて木寺副班長から、ＧＩＳ（地理情報システム）の技術を活用した「長谷山桜マップ」の作成状況について報告がおこなわれました。

パワーポイントで調査結果の報告

新しいコンピューター技術によるビジュアルなデータ整理の紹介に対して会場から驚きのため息がもれ、愛す

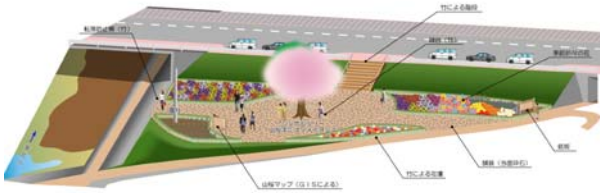
る会の女性会員からは「私らもコンピューターを習わんといけんね。雪さん（渡邊事務局長のこと）に頼もう。」という声も上がっていました。

続いて、矢ケ部班長から大判の資料が全員に配られ、松厳寺前視点場の整備案に対する共助研メンバーによるコンペ作品 13 点が紹介されました。それぞれの作品について提案者から内容説明がなされ、様々な観点からの整備イメージがあることが示されました。



会場からは、県道から降りるための階段の設置方法や、ベンチ・案内板の配置、草花をマイフラワーとして植える花壇の設置などについて具体的な意見が百出しました。「視点場横の柴北川の潜りセキを人が渡れる工夫ができないだろうか」という議論の中で、某「愛する会」の会長から「セキのところの石をどければ、その穴に水が流れてセキの上を渡れるようになる」と提案があったところ、「それではセキは大丈夫？」という質問が出て、「セキが壊れる可能性は・・ある！」と返して一同一気に笑いにつつまれました。

このように具体的な検討に対する意見交換が尽きぬ中、地区の人々や青年会、婦人会に呼びかけて視点場の管理をしていくことが確認され、具体的な整備方法は翌日現場で確かめながら、ということで協議は終了しました。



提案されたコンペ力作の数々

会議の締めとして、赤星副会長より「これまでの議論で長谷づくりのいろんな仕掛けが見えてきました。引き続き共助の心で協力して進めましょう。」とあいさつがあり、３時間に及ぶ会議が終了しました。

■　40 名が交歓した「新年会」

柴北川レディースによる力作の数々

１８時の会議終了を待っていたように、地元の方々が続々と黒松生活改善センターに集まり始めました。会議での机配置から 4 つの島形態に机を並べなおし、各テーブルに今日の料理が運び込まれ始めると、会議の余韻に浸ってあちこちで議論を続けていた一同は、そのメニューの豊富さ、彩りの華やかさ（山の幸、海の幸や川の幸として通称「柴北川のズワイガニ」ことモクズガニ等が盛りだくさん）に感嘆の声をあげ、一気に「新年会」モードに引き込まれました。

約束の１８時半には 40 名強の参加者で会場が埋まり、大塚会長、赤星会長のあいさつもそこそこに、急遽飛び入りの高山議員の乾杯音頭により全テーブルで饗宴の火ぶたがきられました。参加者の中には、これまで２回の「話し合う会」で顔見知りの方も多く、さらに秋に黒松神楽を舞った青年団の方々などの顔も見えて、既に何度も交流してきたような雰囲気で対話が始まり、今回の立役者である「柴北川レディース」による創作？料理の数々に舌鼓を打ちながら会話が弾みました。

参加者の中には、少し異色のカップルが一組加わっていました。塚田さん夫妻です。奥さんは大分建設新聞の美人記者で、長谷での地域づくりの取り組みに興味を持ち、取材を兼ねて参加したとのこ

とです。塚田記者には、先月福岡で開催された共助研主催のシンポジウムでも取材をしていただいており、当会の活動に大変ご理解ある記事を紙上に載せていただいています。また、ご主人は、我々と同業のまちづくりコンサルタントをされており、以前は東京で活躍されていましたが、縁あって現在は別府を拠点として活動を続けておられるとのことです。共助研の活動にも強い関心をもっておられており、会員としての参加を確約していただきました。

塚田記者による当日の紹介コラム（下記）がありますので、当夜の様子の紹介はプロフェッショナルによる紹介文に委ねたいと思います。

塚田夫人（中央の美人）

四方山

先日、高齢化などで寂しくなった中山間地域を活性化しようと活動している共助研の取材をした。そこで熱く語った、豊後大野市大飼町の「柴北川を愛する会」事務局長の渡邊さんのお誘いで、同会の新年会におじゃました▼会場は犬飼の黒松生活改善センター。約40人が集い、和気あいあいと3時間近く。モクズガニや山菜など、土地のうまい物が「柴北川レディース」の手で美味な料理に変身、所狭しと並んだ。柴北川レディース、バンザイ！▼初めてお会いするのに、まるで親戚のおじちゃん、おばちゃんのように接してくださる。「あれ食べよ」「これ食べよ」と勧めてくれるし、「モクズガニの食べ方講座」まで拝聴した。別府生まれの別府育ちで既に母親も祖父母もいない私。親戚づきあいはあまりないので、おふくろの味や温かな接し方など、本当にうれしい晩だった

▼同会は約5年前に川が汚れ始め危機感を抱いた方々が立ち上げた。その後、一人、また一人と加わり、2つの会がまとまることで今の形へ。「長かった。このようになるとは思わなかった」と大塚会長。今では、出席者を複数班に分け、出てくる意見を共助研の方々の手で項目ごとにまとめていく方法にも慣れた。そうして生まれた、客観的な「郷土」の姿、こうしたいという思いを、プリントにして各戸に配った。そうしながら地道に参加者を増やしてきた。新年会翌日には、県から「自由にどうぞ」と借り受けた土地に、山桜を鑑賞できる視点場を整地した。（過去の活動内容については、ネットで「柴北川だより」と検索を）▼新年会の模様などは、近いうちにWeb大分「写真BOX」にも掲載させていただきたいと思っている。地域の夢を、専門家の手で形に―素敵な活動だと感動した。（みならい）

【大分建設新聞（2月3日）より】

柴北川レディースの皆さん

■　マイクロバスに揺られて宿舎へ

会議に続く３時間の饗宴は、「まだ飲み足りない、語り足りない」という参加者の強い思いの中で、「長谷探検隊」隊長のお父さんである二宮さんの「娘もふるさとの宝発見でガンバっとる。親父たちも頑張らなければいけん！」というエールを込めたあいさつで締めくくられ、散会となりました。

参加者全員による手際よい片づけが行われた後、頃合い良くホテルのマイクロバスが到着し、地元の方々の盛大な見送りを受けながら、メンバー一同は心地よい酔いにつつまれて宿舎に向かいました。

ホテル到着が２２時半。さすがに今回の「三重町での反省会」はお流れかと思いきや、どうしても

夜の明かりが恋しいメンバー４名がマチに繰り出し、カラオケスナックで蛮声をあげたとのことです。この性懲りのなさが、当会のエネルギーなのかもしれません。

2.　視点場整備と山桜調査

翌 31 日は、あいにくの雨模様でしたが、山桜視点場整備及び前回未調査のまま残されていた場所での山桜調査を行いました。

■　二人の三浦さんの奮闘で、視点場が形を現す。

三重町のホテルを９時半に出発した一行は、10 時過ぎにセンターに到着しました。今回は、以前からカボスとモクズガニでお世話になっている三浦さんが当初から参加され、我々の準備打合せに耳を傾けておられました。

その後すぐに、松厳寺前視点場に移動して、草刈り後の木くずや枯れ草の清掃や整地作業に取り掛かろうとしたところ、対岸の道路伝いにキャタピラの回転音！何と三浦さんがミニユンボを軽々と操縦し、柴北川を渡河して視点場にかけつけてくれました。

対岸から近付くユンボ

前週に草刈りが終わったとはいえ、現地の平場には多くの土盛や木の根が残っており、スコップやクワによる手作業では人数に任せても大変だな、と話あっていたところへのユンボの登場に、一同感動の面持ち。それからの１時間のユンボの活躍はめざましく、三浦さんの巧みな操作で平場は見る間に平らな広場に変身しました。

三浦さんによる巧みな操作

この間メンバーは、ユンボのあまりの機動力に圧倒されながらも、石ころなどの撤去を進めるチームと、整地後の施設設置計画を検討するチームに分かれて作業をすすめました。というのも、既に前日にベンチの木組み３組が現地近くに運び込まれており、その設置を待っていたからです。このベンチは、「大野川流域ネットワーキング」の三浦さん作成によるもので、今回の作業の多くは、偶然にも同名の二人の三浦さんのご尽力によるものとなった次第です。

メンバーは周りでウロチョロ

広場整地後、裏山に向けて ３ 脚のベンチを無事設置して、全員で記念写真を撮りました。この写真からは、参加者全員が心から満足している様子がありありと伺えます。マチからわざわざ出向いてくる者にとって、この喜びをご当地で味わえることが日頃の生活では経験できない何よりの楽しみであることが、メンバーの表情に如実に表れています。

しかし、メンバーの“喜び”に対する欲望はそれだけには止まりませんでした。　　（以上、文責　波木）

整地が終わり、ベンチの設置へ

■　今年度最後の山桜調査を実施

皆様ご存知の「松厳寺裏山の山桜群開花時の写真（高野様ご提供）、下記」が、山桜調査班にとっては、大きな手懸かり・目標となっています。前回、平成 21 年 12 月５日（土）の調査は、この写真にある、最も山桜が集中していると思われる「山に向かって右側の山桜群」を対象としての、６０本の調査でした。

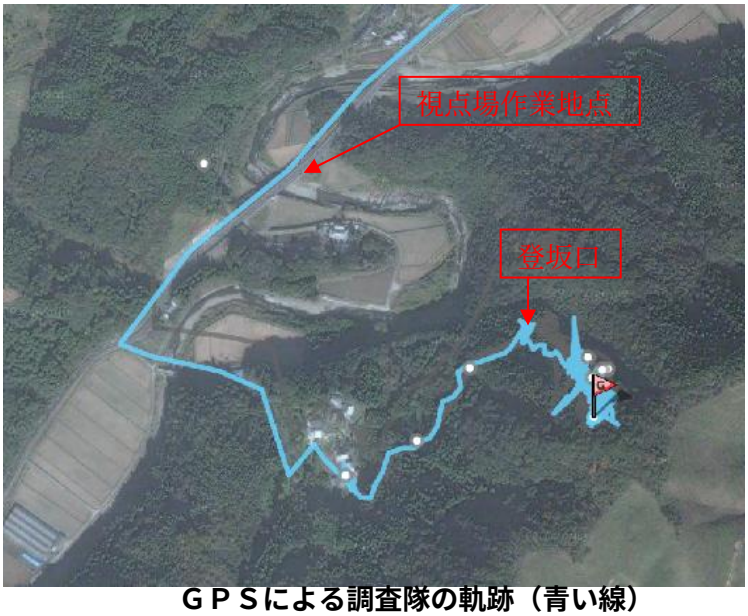
しかし、この写真を見た方であれば「ピークに向かっての左側、竹林上部の山桜群」も気になることでしょう？この場所へのアクセスは、最近では地元の方もほとんど無いとのことです。しかし前回調査時において、大塚会長の案内で「杉林の中を通る林道（作業道？）から竹林を抜けてこの場所へ登れる」ことだけは確認ができていました。

視点場作業を終えての昼食後、小雨模様の中でしたが、玉田、森脇、波多野、木寺の４名で、この場所の調査を決行することとしました。

松厳寺裏山の山桜群（高野さん撮影）

●　調査状況のご紹介

まずは、大塚会長と三浦さんも交えて、林道沿いの登坂口地点まで行き、その後、急勾配、荒れ放題の竹林の中を４名で登り、山桜群地点まで辿り着きました（山本会員作成のルート図参照、G 地点が山桜群のほぼ中心。背景写真は GoogleEarth）。三浦さんには、進入部の竹林等をチェーンソーを用いて伐採して頂きました（写真参照）。



ＧＰＳによる調査隊の軌跡（青い線）

波多野会員が「山桜の発見とテープによるマーキング」、木寺が「GPS 機器での位置の読み取りと樹高の目測」、玉田会員が「幹回り長と直径の測定」、森脇会員が「調査票記入と写真撮影」と作業を分担し、調査を行いました。玉田会員は、鉈を用いての山桜にまとわり付いている「つる」等の除伐作業も行いました。

この地点では、目標として調査本数合計が１００本となるように、最低１２本、我々煩悩の数の１０８本とするなら２０本が目標でしたが、時間の制約もあり、結局、１７本で調査を終えました。

●感想

当該地点では、幹回り 100ｃｍを越す粒ぞろいの山桜が多く、調査員一同、感動しました。ただし、竹が桜の木の回りに大変多く、機会があれば「何とか山桜周辺のみでも竹退治をしたい」と強く思いました。

後ろ髪を引かれながらも、波木事務局長からの帰還指令の電話もあり、山を下りました。調査中、下山時、４人とも何度か足を滑らせましたが、皆が待つ「黒松生活改善センター」まで無事に帰ることができました。

「協働で山に入り、見事な桜の木を発見し、それらを調査、そして一部ながら手入れをする」、この一連の作業は、言葉では表現しにくいところですが「未だ知られていない自然の素晴らしさを発見し、感じて、我々がその懐に居り、やがてはこのことを多くに人に知って頂く可能性に繋がっている」という気持ちとなり、不思議な充足感を持つことができました。

多くの方々にこの山桜調査の楽しさを知って頂きたい、また開花期にはぜひ視点場からの眺めを楽しんで頂きたいとの思いをさらに強くしました。　　（以上、文責　木寺）

鉈によるツルの除伐

チェーンソーによる竹退治

松厳寺前視点場にて（設置したばかりベンチに座って）